『一人同窓会』

作　高見　亮子

登場人物

女１

女２

車内案内係

電車の中。女1、すでに窓側の席に座っている。
女2、舞台後方より登場。
電車の揺れに、足元をふらつかせながら女1の隣の席へ進む。
以下、女1は、適宜対応する。

女2／ここ、よろしいですか？
女1／（なにがしかのリアクション）
女2／ありがとうございます。（座る）私…隣の車両から抜け出してきたんですね。隣は、貸切でクラス会やってるんですよ、小学校のときの。私を含めて三人だけ次の駅から乗り込んだんですけど、ホームにいるときから、ちょっと嫌な予感はしてたんですね。もう三十年もたってるからといえばそれまでなんですけど、それが…誰も私が誰だか覚えてなくて…一人ずつ昔の呼び名で全員を呼んでいくゲームをしたら、私の所でみんな黙っちゃうんです。最初は「やだー、忘れちゃったの？」なんて言って笑ってたんですけど、二人目も、三人目も、四人目も、私の所で無言になっちゃって、そのうち、みんな私の方を見ないようになってきて、誰かが、あっちの方を向きながら「もうこのゲームやめようか」って言い出して、そしたら残りの人たちもあっちの方を向きながら「そうだね」「そうね」って答えて終わりにしちゃったんですよ。「嘘でしょ？　一人ぐらい覚えてくれてないの？」って思って見回したんですけど、みんなチラッと目があうと慌てて目をそらすんですよ。そのうち、だーれも絶対私を見ないようになって、居場所がなくなっちゃって…。担任の有賀先生が来てくれてたら、覚えててくれたと思うんですけど、今日はいらしてないし。たぶん今ごろ、「あれ、誰だっけ？」ってみんなで私の噂をしてるに違いありません。ごめんなさい、こんな話聞かされても迷惑でしょうけど、私、あまりにショックで。だって、それなりに楽しみにしてたんです、今日のクラス会。服もどれにしようかなぁって一ヶ月ぐらい前から考えて。それが、こんなことになるなんて…あの、しばらく、ここに座っててもいいですか？
女1／（なにがしかのリアクション）
女2／よかった。誰かの隣に座ってたくて。たぶんそのうち誰かが様子を見にくると思うんです。ははは。こないかもしれませんけど。でもいくらなんでも、誰か様子を見にくると思うんですね。なぜかというと、私は、元クラスメイトの呼び名を全員言い当てたんですよ。だから、みんな私が元クラスメイトだってことは認めざるを得ないと思うんです。それでこういうことになって私が出てっちゃったら、「ああ、傷つけてしまった」って思うでしょ？　だから、そのうち誰かが私のことをやっとのことで思い出したら、迎えにきてくれると思うんです。「ごめんごめん」

て。そのときに、私も「ごめんごめん、すっかり話し込んじゃって」って言い返したいんですよ。話し込んじゃってって、つまり、あの、あなたとなんですけど。あの、そういうふうにしてもかまいませんか？

女１／（なにがしかのリアクション）

女２／…私、普段はこんなにたくさんしゃべらないんですよ。今自分でもよくしゃべるなあって驚いてるぐらいです。…本当は、よっぽど、自分で自分の名前を教えちゃおうかって思ったんですけど。誰も思い出してくれないから。でも、やめました。意地っていうか…ちょっとね、頭をよぎったことがあって…つまり、名前を言っても思い出してもらえなかったらどうしようって。…私、たぶん、今日のことはトラウマになると思います。普通、トラウマって、子供の頃の体験によるものですよね。こんなに大きくなってからの場合は、トラウマって言わないんですか？

あ。誰かきた。

車内案内係、登場。車両口に立ち…

案内係／わっぱ飯、おてだま寿司、あさり飯、牛肉まいたけ釜飯、ますの寿司、だるま弁当はいかがですか？　わっぱ飯、おてだま寿司、あさり飯、牛肉まいたけ釜飯、ますの寿司、だるま弁当はいかがですか？

女２／（振り返って案内係を確認し）いります？

女１／（なにがしかのリアクション）

女２／（案内係に）いりません。

車内案内係、退場。

女２／お弁当屋さんでしたね。…あ。私、思わず硬くなって黙り込んでたけど、すっかり話し込んじゃってって言い返すためには、話し込んでないとだめですよね。あー、そうだ。いけない。こんどは気をつけないと。…ごめんなさい。今気がついたんですけど…かわったお召し物ですね。あの…私が知らないだけで、著名な方でいらっしゃるんですか？

女１／（なにがしかのリアクション）

女２／それとも…あの、気を悪くされたらすみません、日本の方ではなくて、どこか…

女１／（なにがしかのリアクション）

女２／すみません。もしかしたら、どこかの島の大統領夫人で、この車両をお一人で貸切なのかなぁなんて…そういう方は、こんな電車に乗りませんよね、もっと、自家用の飛行機とか。こんな、隣の車両でクラス会してるような電車に誰が好き好んで乗るもんですか。

女１／…

女２／…もしかしたら、誰も迎えにこないかもしれません。そもそも、私が抜け出したってことに、気づいてないのかもしれません。…いえ、何人かは目にしたと思うんです、私が出ていくところを。気の毒に、見ちゃった人たちは、そのときはちょっと気まずい思いをしたと思うんですね。でも、そのあとあっという間に忘れちゃって、今じゃもう、私が十五分でもあそこにいたってことすら、誰も覚えてないのかも…今のが、たぶん正解だと思います。…じゃあ、あれですね。こんなふうに話し込む練習も必要ないですね。

女１／（なにがしかのリアクション）

女２／…小学生の頃にね、牛乳事件っていうのがありまして。私がそう呼んでるだけなんですけど。だから、私以外の誰にとっても事件でも何でもないと思うんですけど。それに、そんな出来事があったことすら誰も覚えてないって、今となっては確信できちゃうんですけど。でも、今日のクラス会では牛乳事件の話をしようって、私、準備してたんですよ。ほら、クラス会って、暗い思い出を笑える話に逆転させるチャンスかなぁって思って。だから、面白可笑しく話せるように何回もシミュレーションしたんです。家、猫がいるんですね、二匹。ビャンコとシロっていう名前で、あの、ビャンコっていうのはイタリア語で白って意味なんですけど。

女１／…

女２／すみません。ご存じでしたよね。違うんです、猫の話も今日しようかなって思ってて、これ、笑いをとれるんじゃないかなぁなんて勝手に思ってたから。でも、よかった。本番の前に試せて。たいして可笑しくないですよね。ははは。本番もなくなっちゃったんですけど。…だいたい、人の笑いをとるためにビャンコって名前をつけたわけじゃないし。白いからつけたんですよ。でも、家にはすでにシロがいましたから、同じ名前つけるわけにいかなかったんです。はじめは、ホワイトも考えましたけど、かわいげがないでしょ。だめです、ホワイトは。それで旅の六カ国語っていうガイドブックを引っ張り出して、ビャンコに決めたんです。ごめんなさい。話がだんだん逸れていってるってことは自分でもわかってるですけど、止まらなくて。

女１／（なにがしかのアクション）

女２／…牛乳事件のことは、忘れてたんですよ。でも、忘れてたと思ってただけで、本当は覚えてたんです。それっていうのも…ここでまた、シロとビャンコが登場するわけなんですけど…シロっていうのは大人しくて、ビャンコより少しお兄さんなんですね。年齢もですけど、人間的にも。まあ、猫ですけど。それで、ビャンコは落ち着きがないうえにガサ

ツで、食いしん坊で、二人にミルクをあげると、必ずビャンコはシロの皿にも首を突っ込むんです。それを見ているうちに、牛乳事件を思い出しちゃったんですね。…教育実習の先生っていうのが一年に一度くるでしょ。橘っていう男の先生でした。体育の先生で、だから当たり前なんですけどスポーツ万能で、背も高かったんですね。小学校五年生のときだから女の子たちの中にはマセた子もいて、カッコイイ！なんて騒いでて、男の子にも人気があって、つまり、ものすごく人気者だったんです。ただ、私はなんとなく好きになれなくて、それが橘先生にも伝わったみたいで、私にだけはヨソヨソしかったんですよ。ていうか、無視、ですね。それでね、もう一人、登場人物がいて、吉原君っていうんですけど、この子は牛乳が嫌いだったんです。毎日泣きながら牛乳を飲んでて、だから給食の時間になると、吉原君をからかう子がいたり、「ああ、もう」って感じで毛嫌いする子がいたり。…あの、すみませんね、勢いで最後まで話そうとしてますけど、誰も覚えてないような事件なんです。ただ、家で練習してきたから一度も口にしないまま家に持ち帰るのはたまらなくて、つまり、そういう私のためだけの理由で勝手に話してるんです。…それで、ある日の給食の時間に、ああまた吉原君が泣き始める時間だなぁって、それとなく吉原君の机を見たら、もう牛乳瓶が空っぽなんですよ。しかも吉原君はニコニコ笑ってて。私が、「あら？　もう飲んだんだ。いつの間に？」と思ったときでした。橘先生がいきなり大声で「誰だ！」って怒鳴ったんです。「吉原の牛乳を飲んだのは誰だ！」って。担任の有賀先生は、そのときはいなくて、みんな、橘先生の怒鳴り声にびっくりして…だって有賀先生だったら絶対怒鳴ったりしないから…だからみんなキョトンとしたり、首を振って知らない知らないの合図を送ったりしてました。私は「吉原君が自分で飲んだんじゃありませんか？」って言いました。自分でもなんで率先してしゃべり始めたのかわからなかったんですけど、ともかくそう言ったんです。そしたら、こんどはクラス中の子が一斉に私を見てキョトンとしました。私はそういうふうに目立つことをしたことがなかったから、驚いたんでしょうね。そしたら、橘先生がつかつかつかって私の所にきて「佐藤、お前か」って言うんですよ。こんどは私がキョトンとする番です。「お前なんだな」って橘先生が繰り返すので、正直に「いいえ」と答えました。すると「嘘をつくな。立て」って言うじゃありませんか。私は立ち上がりました。それから「いいえ、本当に、私は飲んでません」と言うと、橘先生はいきなり、平手で私の顔を殴ったんです。私はよろけて、それでも本能的に立ち直ろうとして踏ん張って結局転びました。その転ぶまでの様子が可笑しかったらしく、クラスの子がみんな笑いました。私は、目の前に星はチカチカ飛ぶし、ほっぺは痛いし、クラスの子には笑われるし、散々だと思いま

せん？　呆然として座り込んでたら、私を見下ろしながら、橘先生が「お前だけだ、口の回りに白い髭はやしてるのは。二本も飲むからそういうことになるんだ」って言ったんですよ。だけど、それって、おかしくありませんか？　それから…そう、冬だったんですよ、珍しく雪が積もってて、橘先生はみんなに「よし！　じゃあこれから雪合戦をしよう！」って呼びかけて、みんな、ワーッと外に飛び出していって雪の玉を投げ合ってるうちに牛乳事件のことはすっかり忘れてしまったというわけです。

女１／…

女２／思ったとおり、全然、シミュレーションどおりに話せませんでした。かえってよかったのかも、今日みんなの前で話すことにならなくて。だって、ずっと恨みに思ってるみたいじゃないですか。本当は、誰かが、「ああ、佐藤、悪かったな。実は吉原の牛乳飲んだの俺だったんだよ」って言ってくれないかなぁって期待したんですけど。そしたら私は「そうなんだ。早く言ってよ」って言うつもりで…あ、よかった。これもたいして可笑しくないですよね。一番理想的な展開は、ここで一同大笑い、なんですけど、だから、この今の「そうなんだ。早く言ってよ」っていう文句を一番たくさん練習したんです。「そうなんだ。早く言ってよ」。さばけた感じで、しかも大人の女みたいな雰囲気で言いたいなって思って。だって、たかが牛乳だし。もう三十年も前の話だし。私のシミュレーションの中では、今日吉原君が来てて、「吉原ってば牛乳飲めなかったよな」って誰かが言い出したあとに、私が「あ。思い出した！」って続ける感じだったんですね。

車内案内係、登場。車両口に立ち…

案内係／お客様で、こちらの手袋を落とされた方はいらっしゃいませんか？　お客様で、こちらの手袋を落とされた方はいらっしゃいませんか？

女２／！　あ。私です。

案内係／お客様のですか。（女２の元へ行き渡す）

女２／ありがとうございました。あー、落としたことも忘れてました。

案内係／手袋を落とされたお客様が見つかりました。（退場しながら）落とし物、お忘れ物にはくれぐれもご注意ください。

女１／…

女２／…私、洗面所に行ったときには、これ、持ってってないんですよ。…気にしない方がいいですよね。…でも、本当は気にしてるので、気にしたまま家に持ち帰ると、またシロと、ビャンコを相手に次のクラス会

に備えてシミュレーションしなくちゃならなくなるからやっぱり話しちゃいますけど…これ、隣の車両の私が座った座布団の横に置いたんです。はっきり覚えてます。それで、抜け出してきたときに忘れちゃったんです。それも自信があります。鞄に入れた覚えがないから。ということは、隣の車両にあったのを、誰かが車掌さんに渡したってことですよね？どうして私を探しがてら直接渡してくれようとしなかったんでしょう。それとも…やっぱり、私がいたことすら、みんな忘れちゃったんでしょうか。…すみません。どちらが正解だと思いますか？　つまり、私の持ち物だとわかっていながら、私を探すのが面倒で車掌さんに預けたと考えるのと、私はみんなから忘れ去られてしまったと考えるのと。…待ってください。今、他のケースも思いつきました。こういう状況です。誰かが、「あ、こんなところに手袋があると、ビールが倒れたりしたら汚れてしまう」と気を使って、別の場所に移動した。「誰の手袋ですか～、ここに置きますよ～」と声をかけて。そのあと、手袋を移動した人が酔いつぶれてしまった頃に、別の誰かが「あら？　この手袋、誰の？」と周囲の人に声をかける。すると、誰かが、「あの人のじゃないかしら？　ほら、誰も名前を思い出せなくて、気まずくなって出てっちゃった人の」と言うものの、別の誰かが「いや、あの人はここに座ってたんだから、そんなところに手袋を置くわけないよ」と答える。そこで、じゃあこの手袋は、私たちが乗り込む前の人の忘れ物に違いない、車掌さんに届けよう…すみません。あの、眠かったら寝てください。

女１／（なにがしかのアクション）

女２／この手袋、自分で編んだんですよ。ときどき気がむくと編むんです。もし今日誰かが褒めてくれたら、編んであげようかななんて思って。

車内案内係、登場。車両口に立ち…

案内係／間もなく、途中の駅に到着します。

女２／え？

案内係／間もなく、途中の駅に到着します。お降りの方は、お忘れ物のないようご注意ください。お降りの方は、お忘れ物のないようご注意ください。右側の扉が開きます。右側の扉が開きます。

車内案内係、退場。

女２／ここです。クラス会のメンバーが降りるのは。ここで乗り換えて、それから、ユーターンして、まだ戻るんですよ。ほんと、ただ電車の旅。

女１／（なにがしかのアクション）

女２／いえ。私は降りません。このまま、乗ってっちゃいます。どこに行くのか知りませんけど。…あ。降りられますか？（席を立って通り道をつくる）

女１／（なにがしかのアクション）

女２／あ…まだ…（席に座る）…この電車、どこまで行くかご存じですか？

女１／（なにがしかのリアクション）

女２／あ、いいんです、聞きたくなったら、さっきの人に聞きますから。私、会社明日も休みだし。気ままに旅行します。かえってよかったかも。気苦労もなくて、こんなふうにしゃべりたいだけしゃべる旅行ができて。（窓の外に視線）あ。（身を隠す。あるいは、窓から顔をそむける）…（そっと、窓の外に視線。体を起こす）ははは。隠れる必要なんてありませんね。誰も覚えてないんだから。私、一度でいいから、人に捜される経験してみたいなって思うんですよね。どんな気分なんだろう。捜すことはしょっちゅうなんですよ。…あ、動き出しました。いるいる。みんなけっこう酔っ払ってる。大丈夫かなぁ。ははは。誰も気がつかないや。あ～…行っちゃった。（振り返って見送った後、体を元に戻す）

女１／牛乳飲んだの、私です。

女２／…え？　…有賀先生！

（おわり）